

日時：2007年9月18日（火）13：00－19：00

場所：北海道大学学術交流会館

参加者：1部 29名、2部 14名



平成19年11月15日、雪が舞う札幌にてJAFSA月例研究会（北海道地区留学生担当教職員連絡会議共催）が開かれた。今回のテーマは「自然災害時の危機管理について－地震災害を中心に－」であり、まず北海道大学で講演会があり、その後移動して札幌市民防災センター施設見学という2部構成で行われた。第1部の講演会では神戸大学留学生センターの瀬口郁子教授をお招きし、「留学生に対する防災教育－共に生きる地域住民としてその時どうする－」という題目で話していただいた。講演は瀬口氏ご自身が被災された阪神・淡路大震災時の大変貴重かつ重みのある体験談に基づいており、危機管理の重要性を再認識したと共に、多くのことを考えさせられるものであった。

平成7年1月のマグニチュード7を超える阪神・淡路大震災で、神戸大学の留学生7名、日本人学生34名および教職員2名が犠牲になった。講演会で瀬口氏がまず強調されたのは、大規模な自然災害というのは消防、救急、警察などの公共機関の処理能力を遥かに越えており、救助に当たるこれら公共機関の施設や職員もまた被災しているという点である。先の震災直後で救助された方の内、約75%が近隣住民によるものであったというデータも紹介され、日頃の地域住民の結びつきがいかに重要であるかが認識できた。同時に、上の神戸大学のケースにあるように、日頃地域社会とは結びつきが薄くなってしまいう留学生の犠牲者の割合が高い傾向にあったのは無関係ではないのではと感じられた。さらに震災直後（発生から一週間以内）の情報源は近隣の人やラジオであった

という。当時、神戸大学の留学生が多数住んでいた人工島ポートアイランドの学生寮では、情報源の乏しさからさまざまなデマが飛び交い、「島が沈んでいる」というものまであったという。これらの点から留学生は「情報弱者」であるとおっしゃられた瀬口氏の言葉は強く印象に残り、それをどう改善していくかがこれからの課題になると思った。

現在、神戸大学では、留学生に対し震災（災害）授業を行い、災害は避けられないが自助・共助体制の確立によって最小限にとどめることができるという「減災」の概念を教育している。さらに、震災に遭った留学生の体験を共有することによって「災害文化」を伝えようとしている。教材として使われているのは、当時の神戸大学留学生たちの震災体験談をまとめたもので、日本語、英語さらに留学生の母国語といった多言語で書かれている。加えてこれらの体験談は朗読ボランティアによって音声としても保存され、講演中に実際に聴いたが、瀬口氏がおっしゃったように人の声というものは想像以上にインパクトがあった。その他の教材としては被災した留学生が撮った写真などもあり、震災から学ぼうとする神戸大学の想いが伝わってきた。なお、これらの資料は神戸大学のウェブページからも見ることができる。

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/16-47/index.html>

第2部は、札幌市民防災センター見学である。このセンターは、様々な災害と防災の知識を学べる体験型施設になっており、第1部の出席者のうち希望者が実際に体を動かしながら災害をあらためて実感する機会でもあった。

参加者は、地震体験コーナー、消火体験コーナー、煙避難体験コーナーでシミュレーション訓練に挑戦。地震体験では、部屋のセットの中で安全に「兵庫県南部地震」等の激しい揺れに対する対応を学ぶことができる。地震を知る人間にとっても「揺れ」は恐ろしいが、地面の揺れを経験したことのない留学生にとって、その衝撃はいかばかりものかとあらためて考えさせられた。

日本には「防災」という考え方がある。また、多くの日本人は、小・中学校で、火災の際の避難訓練など、何らかの体験型防災教育を受けているだろう。日本で起こりうる災害に対する知識を、それを想像することも難しい留学生にいかにか効果的に伝えていくかということが、今求められている。

報告者：清水宗敬氏(北海道大学)、高橋彩氏(北海道大学)